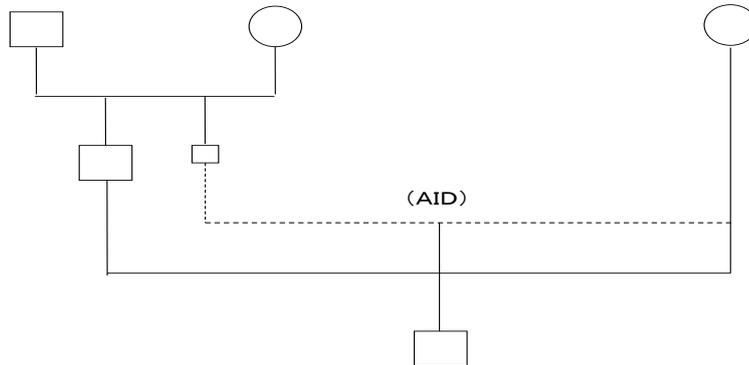


夫の兄弟からの精子提供 対外授精の場合
(ジェノグラム②)



解説欄では、「精子の提供者が夫の実父だと、夫との血のつながりは担保される。その半面、子どもは遺伝上、夫の“きょうだい”になり、血縁関係が複雑になる」としている。

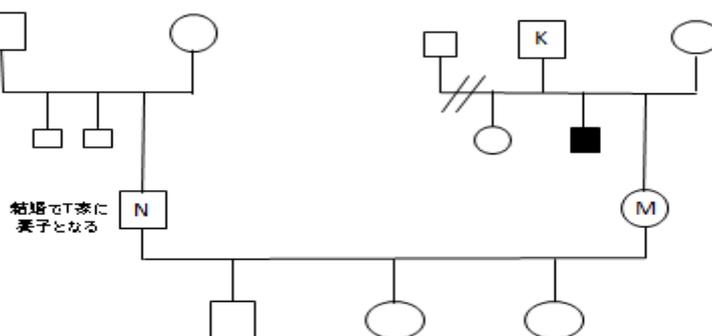
ジェノグラム①のように視覚化することによって、そのような危惧がさらに分かりやすくなっている。生殖医療技術が発展してきたからこそ生じている課題かもしれません。

従来は…

前回紹介したような、未成年の時期に（特別）養子縁組をする場合や以下に紹介するような婚姻による女性方への入籍（男性が女性の家族の養子となり妻の姓を名乗る）がよく見られるパターンです。

例えば、T家のような場合です。

T家



なお、結婚により養子となった場合は、ジェノグラム上に、「結婚により〇〇家の養子となる」といった記載を加えるとすればいいでしょう。

ところで、T家は地域の名士として古くから知られた一族です。さらに、KはT家の名前をさらに大きく発展飛躍させる働きをしたとのこと。

Kは初婚でしたが、離婚した子連れ的女性と結婚した理由は定かではありません。何らかの事情や訳があったと思われます。その事情や背景は夫婦関係に何らかの影響を与えていたと思われます。

ところで、K夫婦には男児とM子が年子で生まれました。年齢が近い二人は仲が良かったとのこと。M子の異父姉は10歳ほど年上でしたので、M子は義理の父と実の母の双方に対して気遣いながら、さらに、親代理としての役割を果たすことになりました。とても控えめな人だったとのこと。

M子は父の愛情を一身に受けました。それは溺愛に近かったようです。T家の跡継ぎとして期待された兄はM子が4歳の頃、病気で亡くなっています。その結果、KのM子への期待はかなり強くなっていきました。また、M子も父の期待を意識するようになりました。

長男がなくなったことによる役割の変化が顕著に伺われることになったのです。M子にとっては、Kの思いを受けた“家”や“家業”の伝承は当然のことだったのかもしれない。

もちろん、結婚は“家を継ぐ”こと以外の何ものでもなかったのでしょう。選んだ相手は三男でした。M子の夫(N)は、結婚により養子となりT家を継ぐという役割を引き受けたと考えることができます。

Nはその役割を見事に引き受けてきました。そのための苦労は計り知れないものがあったかもしれません。

T家にとって、次の大きな課題はN・M夫婦の子どもが“家”や“家業”を継ぐかどうかです。その際、3人の子どもから見れば、夫婦としてのNとM、また、両親としてのNとMをどのように感じているのかが大きなポイントになるかもしれません。

“家”や“家業”を継ぐことを最優先してきた親の思いはともかく、親子間で生じるギャップやズレの解決に向けて、どのように取り組んでいくのかが、Tファミリーに与えられた試練なのかもしれません。

(つづく)